

### 資料3 公同的精神

「彼がそこを去って行くと、彼を迎えに来たレカブの子ヨナダブに出会った。エフーは彼にあいさつして言った。『私の心があなたの心に結ばれているように、あなたの心もそうですか』。ヨナダブは、『そうです』と答えた。『それなら、こちらに手をよこしなさい。』」  
(Ⅱ列王記10章15節)

#### 序

1 この愛という偉大なる負債を払おうとしない人たちでさえ、愛はすべての人に注がれるべきものであるということは認めています。「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」(ヤコ2章8節、レビ19章18節、マタイ10章19節)とは、律法の中の律法と呼べるもので、それを耳にするすべての者がその正しさを納得する力を内に秘めています。しかも古い時代の熱狂者が付け加えた「『自分の隣人』、自分の親戚・知人・友人を愛し、『自分の敵を憎め』」(マタ五)という悲惨な解釈に従ってあなたの隣人を愛せよというのではありません。とんでもありません。主はこう言われました。「わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、あなたを呪う者を祝福しなさい。あなたを憎む者に善を行い、あなたを侮辱し迫害する者のために祈りなさい。それでこそ、天におられるあなたがたの父の子どもになれるのであり」、またすべての人にそのように見てもらえるのです。「天の父は、悪い人にも良い人にも太陽を上らせ、正しい人にも正しくない人にも雨を降らせてくださるからです」(マタ5章43節～45節、ルカ6章27節～28節参)。

2 しかし、私たちが神を愛している人たちに対して負っている特別な愛というものがあるのも確かです。ダビデも「地にある聖徒たちには威厳があり、私の喜びはすべて、彼らの中にあります」(詩篇16篇3節)と言っています。また彼よりも偉大な方が言っています。「あなたがたに新しい戒めを与えましょう。あなたがたは互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、そのように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。もしあなたがたの互いの中に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです」(ヨハ2章23節～25節。これはヨハネが何度も強調している愛です。「互いに愛し合うべきであるということは、あなたがたが初めから聞いている教えです」(Ⅰヨハ3章11節)。「キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。ですから私たちは」、もし愛がそのために私たちを招くならば、「兄弟のために、いのちを捨てるべきです」(同16)。さらに「愛する者たち。私たちは、互いに愛し合いましょう。愛は神から出ているのです。愛のない者に、神はわかりません。なぜなら神は愛だからです」(同4章7～8節)。「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。愛する者たち。神がこれほどまでに私たちを愛して下さったのなら、私たちもまた互いに愛

し合うべきです」(同10~11節)。

3 この愛に反対する者はいません。しかしすべての人がそれを実践しているでしょうか。日々の経験を見ればその反対であることが分かります。「キリストが命じられたとおりに、互いに愛し合っている」(Iヨハ3章23節参)クリスチャンがどこにいるでしょうか。そこにはあまりに多くの障害が横たわっています。一般的に言って大きな障害が二つあります。第1に、人はみな同じような考え方ができるわけではないということです。その結果として第2に、人はみな同じような歩み方ができるわけではないということで、小さなことですがいくつかの点において、感情の違いの度合いに応じてその実践も違ってくるのです。

4 しかし、意見の違いや礼拝様式の違いが完全に外的に一致する妨げになるとしても、そのことで愛情における一致が妨げられる必然性があるでしょうか。同じような考え方をすることができなくても、同じような愛し方をすることはできないのでしょうか。必ずしも同じ意見を持っていなくても一つ心でいることはできないのでしょうか。もちろん可能であり、そのことについては何の疑いもありません。こうした小さな相違があっても、神の子はみなこの点で一つになることができます。相違はそのまま残しておきながら、愛と善き行いにおいて互いに前進できるのです。

5 先ず、エフーは複雑な性格の人物でしたが、この点でエフーの例は、すべての真面目なクリスチャンが注目して倣うだけの価値が十分あります。「彼がそこを去って行くと、彼を迎えに来たレカブの子ヨナダブに出会った。エフーは彼にあいさつして言った。『私の心があなたの心に結ばれているように、あなたの心もそうですか』。ヨナダブは、『そうです』と答えた。『それなら、こちらに手をよこしなさい』」(II列王10章15節参)。この聖書の箇所は二つの部分に分かれます。前半は、エフーがヨナダブに尋ねた「私の心があなたの心に結ばれているように、あなたの心もそうですか」という質問です。後半は、ヨナダブが「そうです」と答えたときにされた「それなら、こちらに手をよこしなさい」という申し出です。

—

1 先ず、エフーがヨナダブにした「私の心があなたの心に結ばれているように、あなたの心もそうですか」という質問について考えてみましょう。最初に観察できることは、ヨナダブの意見に関しては何の問い合わせもされていないということです。彼が実際、彼特有の非常に珍しい意見を持っていたことは確かで、その意見は彼がどう行動するかということに強い影響力を持っていました。同時に彼は、その意見を子の子から一番最後の子孫にまで伝えようとするほどまでにそこに強調点をおいていました。これは、ヨナダブの死後何年も経過してエレミヤが加えた説明から明らかです。「そこで私は、ヤアザヌヤと、その兄弟と、そのすべての息子と、レカブ人の全家を率い、……私は、レカブ人の家の子たちの前に、ぶどう酒を満たしたつぼと杯とを出して、彼らに『酒を飲みなさい』と言った。すると彼らは言った。買たちはぶどう酒を飲みません。それは、私たちの先祖レカブの子

ヨナダブ（あるいはエホナダブ）がと（これはもしその言葉が「レカブの子である私たちの先祖ヨナダブ」となっていればさらにはっきりしていたと思われませんが、ヨナダブはレカブへの愛と敬意のゆえに、彼の子孫がレカブという名で呼ばれることをおそらく望んでいたのだらうと思います）、「私たちに命じて、『あなたがたも、あなたがたの子らも、永久にぶどう酒を飲んではならない。あなたがたは家を建てたり、種を蒔いたり、ぶどう畑を作ったり、また所有したりしてはならない。あなたがたが寄留している地の面に未長く生きるために、「一生、天幕に住め』。……それで、私たちは、すべて先祖ヨナダブが私たちに命じたとおりに、聞いて行なってきました」（エレミヤ35章3節～10節）。

2 エフーは（世の中のことにしても宗教的なことにしても「気が狂ったように御する」（Ⅲ列王9章20節参）のが彼のやり方だったように思われますが）、これらのことについてはまったく心配していません。むしろヨナダブの好きにさせています。このどちらも、双方が主張した意見について平和を乱すようなことはしていないようです。

3 今でもなお、善良な人たちの多くが特殊な意見を受け入れている可能性は大いにあります。その中には、ヨナダブのように変わった意見を持つてくる場合もあるかもしれません。「一部分」しか「知らない」という条件のもとで（Ⅰコリ13章12節）すべての人が同じようなものの見方をすることなどあり得ません。日常生活だけでなく宗教に関しても複数の者から複数の考え方が出てくるということは、人間が現在持っている理解の弱さと足りなさの避けることのできない結果です。万物の創世以来そうであったし、また「万物の改まる時まで」（使徒3章21節参）同じであろうと思います。

4 さらに話しを進めましょう。だれであつても自分が持っている個々の意見は当然みな真実であると考えていますが（というのも、どんな意見であれ真実であると思っていないとすれば、それはその意見を持っていないということの意味するわけです）、自分の個々の意見を一つにまとめたものが全部真実であると確信できる人はいません。考えるタイプの人みな、自分の個々の意見を一つにまとめたものが全部真実であるとは思っていません。*Humanum est arrare et nescire*、つまり多くの事柄において無知であり、ある事においては誤るということは人間性の必然的状态だからです。したがって彼は、これが自分の実状であるという感覚を持っているわけです。彼は自分が特定のどの事柄について間違っているかは知らないし、またおそらく知ることはできなくても、全体的に見れば自分が間違っていることを知っています。

5 「多分知ることはできない」と申し上げたいと思います。克服しがたい無知がどの程度広がっているかだれにも分からないからです。あるいは（これも同じことですが）克服しがたい偏見はどうでしょうか。それはしばしば感じやすい心の中に染みわたってしまっているため、そのように深く根ざしているものを後から引き抜くことは不可能です。どんな間違いであれ、その間違いに伴うすべての状況を知っているものでなければ、どの程度その間違いは咎められるべきかというようなことを言える者などいません。すべての罪責は意志と共に一致して働くものが前提として必要だからです。そしてこのことに関して裁

くことができるのは、心を探られる神だけです。

6 したがって賢い人であれば誰であっても、自分にも認めて欲しいと思うだけの思考の自由を他の人にも認めるでしょう。また他人がその意見をこちらに強いてほしくないのと同様に、自分の意見を彼らにも強いるようなことはしません。彼は自分と違う人にも忍耐をもって接し、愛のゆえに一つになりたいと願う人にあの単純な質問をします。「私の心があなたの心に結ばれているように、あなたの心もそうですか」。

7 第二に、ヨナダブの礼拝様式については、きわめて大きな違いがあったということが十分考えられますが、エフーは何の詮索もしていません。当然ヨナダブの子孫もヨナダブ自身もエルサレムで神を礼拝したでしょう。他方エフーは礼拝しませんでした。彼は宗教よりも国家の政策に関心がありました。したがって彼はバアルの礼拝者たちを殺し、「バアルをイスラエルから根絶やしにして」いながら、都合の良い「ヤロブアムの罪、すなわち金の小牛」を礼拝する「ことをやめようとはしませんでした」（Ⅱ列王10章29節～29節）

8 しかし、正しい心を持った人たち、「責められることのない良心を保ちたいと」（使徒24章16節）願っている人たちの間でさえさまざまな意見がある以上、神を礼拝する方法はいくつもあるにちがいません。多種多様な意見があるということは、必然的に実践も多種多様になるということの意味しているからです。あらゆる時代を通じ、最高存在に関する意見ほど相違のある問題はありませんでした。それゆえに神を礼拝する方法ほど、互いの意見が異なるものも他にありませんでした。もしこれが異教の世界だけの話であれば何も驚くに足りません。「自分の知恵によって神を知ることがない」（Ⅰコリ1章21節参）ということを知っているからです。したがって彼らはどのように神を礼拝したらよいかを知ることができませんでした。しかしキリスト教の世界においてさえ、「神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません」（ヨハ4章24節）ということには一般的に同意していても、神を礼拝する個々の様式については、不思議にも異教と同じほどに多種多様なのです。

9 ところで私たちはそのように多種多様なものの中からどのように選べばよいのでしょうか。他の人に代わって選べる人もいないし、他の人に命令できる人もいません。だれであっても、聖さと神から来る誠実さをもって（Ⅱコリ1章12節参）自分の良心の命ずるところに従う以外にありません。それぞれ自分の心の中で確信を持ち（ローマ14章5節参）、自分に与えられた最高の光に従って行動することです。またどのような被造物も、他の人を強制して自分のルールに従って歩ませることのできる力は持っていません。このように神は兄弟の良心の上になたて威張る権利を人の子たちのだれにも与えておられません。だれであっても自分で判断しなければなりません。「おのおのが自分のことを神の御前に申し開きしなければならない」（ロマ14章12節参）からです。

10 したがってキリストに従う者はだれでも、クリスチャンの制度の性質上、ある特定の会衆、または普通の言い方では教会の会員になる義務があります（これは神を礼拝する

特定の方法があるということを意味します。「ふたりの者は、仲がよくないのに、いっしょに歩くだらうか」（アモ3章2節参）ということです。しかしこの会衆よりもあの会衆のほうがよい、あるいはこの礼拝様式よりもあの礼拝様式のほうがよいなどということを決めるときに、この地上において自分の良心以外のいかなる力によっても義務として強いられることは決してありません。私たちの出生地が自分の属する教会を決めるものである、と一般的に考えられていることは私も知っています。たとえば英国で生まれた人は「英国々教会」と呼ばれているものの会員になるべきで、その教会で定められている特定の方法で神を礼拝することになるわけです。私はかつてこの考え方を熱心に支持してきましたが、この熱意を弱めなければならない理由が多く出てきました。この考え方には道理を弁えた人であればだれであっても否定できないような困難を伴うと私は思います。その中でも決して小さな理由とは思えないものを挙げてみます。もしこのルールが行われたならば、カトリックからの宗教改革はあり得ませんでした。

このルールは宗教改革全体が立っている個人の判断の権利（right of private judgment）を完全に破壊するからです。

11 ですから私は、あえて自分の礼拝様式を他人に押しつけようとはしません。私は自分の礼拝様式こそ真の意味で原始的であり使徒的であると信じています。しかし、私の信仰は他の人のルールにはなりません。したがって、愛のゆえに一致したいと願う人に対して以下のような質問はしません。「あなた、私の教会の人ですか。私と同じ会衆に属していますか。あなたは私と同じ教会政治の形態を受け入れ、同じ教会の役目を役員として認めていますか。私が神を礼拝するのと同じ形態の祈りにあなたも加わっていますか」。また私は以下のような尋ね方もしません。「私と同じ態度と方法で聖餐を受けていますか」。さらに洗礼の執行に際して、受洗者の保証人を認めるかということでも私と意見を同じくしているかも尋ねません。また洗礼式の方式に関しても受洗者の年齢についても、自分と意見が同じか尋ねません。それどころか（私の中ではきわめてはっきりしていることですが）、洗礼と聖餐を認めるかということについても尋ねません。このような事柄については触れないでおきます。必要ならばそのことについては都合のよいときに話をしようと思います（使徒24章25節）現在私がしたいただ一つの質問はこれです。「私の心があなたの心に結ばれているように、あなたの心もそうですか」。

12 ところでこの質問の真意は何でしょうか。私はこの質問を、エフーが言おうとしていた意味で考えてはいません。キリストに従う者がこの質問を兄弟のだれかにするとき何を理解しているべきかということです。

その意味の第一はこれです。あなたの心は神に対して正しいといえますか。神の存在と完全を信じていますか。神の永遠怪・無限性・知恵・力を信じていますか。神の正義・憐れみ・真実を信じていますか。神が今「その力あるみことばによって万物を保っておられる」（ヘブ1章3節参）ことを信じていますか。しかも神が最も細かい事柄や最もいやな事柄に至るまで、ご自分の栄光と神を愛する者の善のために支配しておられることを信じてい

ますか。あなたは神のことについて神的証拠、超自然的確信を持っていますか。「見るところによってではなく、信仰によって歩んでいますか」（Ⅱコリ 5 章 7 節）。「一時的なものを見ずに、いつまでも続くものを見ていますか」（ⅠⅠコリ 4 章 18 節ということです）。

12 あなたは「万物の上であり、とこしえにほめたたえられる神」（ロマ 9 章 5 節参）である主イエス・キリストを信じていますか。キリストはあなたのたましいに「啓示されていますか」（ガラ 1 章 16 節参）。あなたは「イエス・キリスト、すなわち十字架につけられた方」（Ⅰコリ 2 章 2 節）を知っていますか。キリストは「あなたのうちにとどまり、あなたも彼のうちにとどまっていますか」（ヨハ 6 章 56 節、Ⅰヨハ 4 章 13, 15 節参）。「信仰によってあなたのうちにキリストが形造られて」（ガラ 4 章 19 節、エペ 3 章 17 節参）いますか。あなたは自分のわざと自分の義を完全に放棄してから、「イエス・キリストを信じる信仰による」（ロマ 3 章 22 節）「神の義に従いましたか」（ロマ 10 章 2 節参）。あなたは「自分の義ではなくて、信仰による義によって、キリストの中にある者と認められていますか」（ピリ 3 章 9 節参）。あなたはキリストによって「信仰の戦いを勇敢に戦い、永遠のいのちを獲得していますか」（Ⅰテモ 6 章 12 節参）。

14 あなたの信仰は、愛のエネルギーで満ちあふれていますか。あなたは神を愛していますか。「すべてのものに勝って」とはあえて言いません。その言い方は聖書的でもないし、あいまいな表現だと思います。あなたは「心を尽くし、知性を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして」神を愛していますか（マコ 12 章 30 節、ルカ 10 章 27 節）。あなたは神のみに幸せを求めていますか。あなたは自分が求めているものを見だしていますか。あなたのたましいは「主をあがめ、あなたの霊は、救い主なる神を喜びたたえていますか」（ルカ 1 章 46~47 節参）。あなたは「すべての事について、感謝する」（Ⅰテサ 5:18）ことを学んで、「感謝するのは、喜ばしく、良いことである」と思っていますか。神はあなたのたましいの中心におられますか。神はあなたの願望の総計であると言えますか。あなたはそれに応じてあなたの「宝を天にたくわえ」（マタ 6 章 20 節参）、「他のすべてのものをちりあくと思っていますか」（ピリ 3 章 8 節参）。神を愛する愛のゆえに、世を愛する愛はあなたのたましいから追い出されていますか。そうであるならあなたは「世界に対して十字架につけられています」（ガラ 6 章 14 節参）。「あなたは」地のすべてのものに対して「死んでおり、あなたのいのちは、キリストとともに、神のうちに隠されてあるのです」（コロ 3 章 17 節参）

15 あなたは「自分のところを行うためではなく、あなたを遣わした方のみところを行う」（ヨハ 6 章 38 節）ために仕事に就いていますか。あなたが自分に与えられた仕事を終えて父の家に帰るまで、この地上にしばらく滞在し、知らない土地で数日を過ごすためにあなたを遣わされたその方のことです。「天におられるわたしの父のみところを行う」（マタ 7 章 21 節参）ことはあなたの食べ物であり飲み物ですか。すべてのことについて「あなたの目は健全ですか」（マタ 6 章 22 節）あなたは神を常に見ていますか。常に「イ

イエスから目を離さないでいる」と言えますか（ヘブ12章2節）。何をするときにもイエスに向かっていきますか。労働においても、事業においても、会話においても、あなたはイエスに向かっていきますか。すべてのことについて神の栄光のみを目指していますか。あなたは「ことばによると行いによるとを問わず、すべて主イエスの名によってなし、主によって父なる神に感謝していますか」（コロ3章17節参）。

16 あなたは神の愛のゆえに「恐れつつ」神に「仕えていますか」（詩編1章11節参）。「おののきつつ喜んでいきますか」（同）。あなたは死や地獄そのものよりも神を悲しませることを恐れていますか。あなたにとって「神の栄光の目を怒らせる」という考えほどに恐ろしいものは他にありませんか。「偽りの道」、すなわち神の聖く完全な律法を犯すことであれば、どのようなことも「ことごとく憎んで」（詩119篇104節）いますか。あなたはこの点で、「神の前にも人の前にも責められることのない良心を保つように、と最善を尽くしていますか」（使徒24章16節参）。

17 あなたは隣人に対してまっすぐな心を持っていますか。あなたはすべての人を例外なしに「あなた自身のように愛していますか」（レビ19章18節など）。「自分を愛する者を愛したからといって、あなたがたに何の良いところがあるでしょう」（ルカ6章32節参）。あなたは「自分の敵を愛していますか」（マタ5章44節）。あなたのたましいは敵に対して善意と優しさの情で満たされていますか。あなたは神に敵対する者さえも愛していますか。感謝も聖さもない人たちを愛していますか。あなたの中には彼らに対する同情がありますか。あなたは彼らのために「（一時的に）のろわれた者となることさえ願っていますか」（ロマ9章3節参）。あなたは「あなたをのろう者を祝福し、あなたを侮辱し、迫害する者のために祈る」（マタ5章44節参、ルカ6章28節8参）ことによって、このことを表していますか。

18 あなたは行いを通して自分の愛を示していますか。あなたは時間があるとき、機会のあるたびに、「すべての人に対して」、すなわち良く知っている隣人であれ知らない人であれ、友人であれ敵であれ、善人であれ悪人であれ、すべての人に実際に「善を行って」（ガラ6章10節参）いますか。彼らに対してできる限りの善を行っていますか。彼らが必要としているものは何でも与える努力をし、力の限りを尽くして霊肉両面で助けになろうとしていますか。もしあなたにこのような心があるならば、一クリスチャンならだれでも「あります」と言って欲しいと思いますが、またあなたが真実にそのことを願っているならば、そしてそれを得るまで求めるならば、「わたしの心があなたの心に結ばれているように、あなたの心も正しい」と言えるのです。

## 二

1 「それなら、こちらに手をよこさない」。これは「私と同じ意見を持って」という意味ではありません。その必要はありません。わたしはそのようなことを期待していません。望んでもいません。また「私があなと同じ意見を持つ」という鼠峠でもありません。わたしにはそれはできません。それは私が選択すればどうにかなるような問題ではありません。

ん。私は自分がこうだと思ふときには考えることはできないし、それは見たり聞いたりすることも同じです。あなたは自分の意見を持っていてください。私もそうします。しかも今まで通りにしっかりと持っていてください。あなたが私のところに来たり、私をあなたのところまで連れていったりする努力さえ必要ありません。私はあなたにこれらの点について議論して欲しいとも思わないし、あなたがこれらの点に関して一語たりとも聞いたり話したりすることを望んでいません。どちらの意見もそれぞれそのままにしておきましょう。ただ「こちらに手をよこさない」ということです。

2 私は「私の礼拝様式を受け入れなさい」と申し上げるつもりはありません。また「あなたの礼拝様式を受け入れましょう」と申し上げるつもりもありません。これもまた、私が、あるいはあなたが選択すればどうにかなるような問題ではありません。私たちはそれぞれ自分の心の中で確信を持って（ロマ14章5節参）行動すべきです。自分が最も神に喜ばれると信じるものを固く持っていてください。私もそうしたいと思います。私は司教制（episcopal）形態の教会政治こそ聖書的であり使徒的であると信じています。もしあなたが長老派や独立派のほうが良いと思うなら、今もそう考えていかまわれないし、それに従って行動したらよいと思います。私は幼児洗礼を信じています。それも浸礼でも滴礼でも構いません。もしあなたが違う信念を持っているならば、今もそう思っていて構わないし、その信念に従えばよいと思います。文書による祈禱は非常に役に立つと私は思います。特に大きな会衆のときには功を奏します。自由な祈禱のほうが役に立つと思うなら、その自分の判断に相応しい行動を取ってください。私は人が洗礼を受ける時の水を禁じるべきではないと思います。また死に向かわれる主を記念してパンを食べ、ぶどう液を飲むべきだというのが自分の気持ちです。しかしもしあなたがこのことを確信していないならば、自分の光に従って行動してください。私はこれらの点に関して一瞬たりともあなたと議論したいと思いません。こうした小さな点は、とりあえずのけておきましょう。また、あえて見ないでおきたいと思います。「もしあなたの心が私の心のようなならば」、もしあなたが神と全人類を愛しているならば、わたしはもう「こちらに手をよこさない」とは言いません。

3 私が言いたいのは、第一に、私を愛してくださいということです。あなたが全人類を愛するように私を愛してくださいというだけでなく、あなたの敵や神の敵、またあなたを憎む者や「侮辱し迫害する者」を愛するように私を愛してくださいというだけでなく、見知らない人や、その人について良いか悪いかを知らない人を愛するように私を愛してくださいというだけでもありません。私はこれでは満足できません。「もしあなたの心が、私の心があなたに対して正しいように私に対して正しいならば」、優しい愛情をもって、兄弟よりも近い友人として、キリストにある兄弟として、新しいエルサレムの市民同士として、私たちの救いのための同じ将軍の下で（ヘブ2章10節参）同じ戦いを戦っている兵士同士として私を愛してください。「イエスにある御国と忍耐とにあずかっている者として」（黙示1章9節参）、「イエスの栄光をともに受ける共同相続人として」（ロ



マ8章17節参)私を愛してください。

4 「忍耐と親切」(Iコリ13章4節参)を伴う愛をもって(あなたが多くの人たちを愛するよりも程度の高い愛し方で)私を愛してください。また忍耐をもって愛してください。私が無知であったり道を踏み外していても、辛抱し、私の重荷を増し加えることをしない忍耐深い愛で愛して欲しいと思います。その愛はなおも優しく温和で同情心に溢れたものであって欲しいのです。あなたよりも私のほうが神の仕事で成功をみることを主が喜ばれるときも、「ねたまない」愛であってください。私の愚かさや弱さ、あるいは私が神のみこころに従って行動していない(たとえあなたにはときどきそう見えることがあったとしても)ことにも「怒らない」愛で私を愛してください。私のした「悪を思わない」ような愛、またあらゆる嫉妬と悪い憶測を除いた愛で私を愛してください。「すべてをおおう」愛、私の過ちや弱さを決して暴露しない愛で私を愛してください。その愛は「すべてを信じる」愛、いつも喜んで最善を考える愛、私のすべての発言と行動を最も公平に解釈する愛であって欲しいと思います。また「すべてを期待する」(Iコリ13章4~7節参)愛、述べたことが全く行われなかった場合も、それが述べたような事情のもとに行われなかった場合もすべてを期待し、あるいは少なくとも良い意図をもってなされたか誘惑という突然の圧力によってなされたならば、やはりすべてを期待する愛であって欲しいと思います。また誤っているものがすべて神の恵みによって矯正されること、欠けているものがすべてキリスト・イエスの憐れみの豊かさによって供給されることを終わりにいたるまで期待する愛であってください。

5 第二に私が言いたいのは、祈るときにはいつでも私のために神に祈って欲しいということです。

誤っていることがあれば速やかに矯正し、私の中に欠けているものがあれば供給して下さるように神と格闘して欲しいということ。あなたが恵みの御座に最も近づくと、その場にまさに臨在しておられる神に祈り求めてください。私の心がさらにあなたの心のごとくなるように、神に対してもに対してもさらに正しい心の状態になるように、私が目に見えないものをさらに確信し(ヘブ11章1節参)、キリスト・イエスにある神の愛についてさらにはっきりと見ることができるよう、見るところによってではなく、信仰によってさらに堅く歩むことができるように(IIコリ5章7節)、さらに熱心になって永遠のいのちをつかむことができるように、神に祈ってください。神とすべての人を愛する愛が私の心にますます注ぎ込まれるように、天におられるわたしの父のみこころを行う(マタイ12章50節)熱心と積極性がさらに増し加えられ、良いわざにさらに熱心になり(テトス2章14節)、すべての悪の現れから離れる注意力がさらに与えられるように祈ってください。

6 第三に私が言いたいのは、私に愛と善行を促して欲しいということ(ヘブ10章12節2参)。機会があるたびに、私のたましいの健康に良いとあなたが信じるすべてのことを愛によって私に語り、あなたの祈りを補ってください。神が与えてくださった仕事

をするために私を励まし、さらに完璧にそれを行うにはどうしたらよいかを教えてください。私を見ていて、私を遣わした方のみこころを行うよりも自分の考えをしているのではないかと思うとき、いつでも「愛情をもって私を打ち、私を責めてください」（詩篇14篇15節）。私のあやまちを修正し、私の弱きを強くし、私を愛の中に建て上げ、それがどのような種類のものであれ私を主の用にさらにかなうものとする助けになることは、遠慮せずに何でも言ってください。

7 最後に私が言いたいことは、言葉だけで愛することをせず、行いと真実をもって私を愛して欲しいということです（Iヨハ3章18節参）。良心的にできる範囲で（あなた自身の意見と礼拝様式を依然保ったままで）私と一緒に神の仕事をしてください。漣を取り合って進みましょう。あなたがこの点まで協力できるのは確かです。すなわち、あなたがデュにおいて、神がだれを用いようと、神の仕事について敬意をもって語り、神の説教者について親切に語ってください。そしてそれがあなたの力でできることなら、彼らが困難や苦悩の中にいるときに彼らに同情するだけでなく、喜んで効果的な助けの手を差し伸べてください。彼らがあなたのゆえに神に栄光を帰するためです。

8 この最後の点について述べたことに関しては、二つのことに注意を払っておきたいと思います。一つは、私の心がその人の心に対して真実であるようにその人も私に真実であってくれる人、その人に対して私が主張する愛、愛の奉仕、霊的、二次的助けは、神の恵みによって私の力量に応じて、私も同じものを彼に与える用意ができていくということです。もう一つのこと、私はこのことをただ自分のためだけに求めているのではないということです。神と人に対して正しい心を持っているすべての人のためでもあるのです。これはキリストが私たちを愛したように、私たちも互いに愛し合うためです。

### 三

1 今まで論じてきたことから一つの結論を引き出したいと思います。私たちはここから「公同的精神」とは何かを学ぶことができます。

公同的精神という言い方ほど、はなはだしく誤解され、間違った危ない適用がされてきた表現はまずありません。しかし前述の論点を冷静に考える人であれば、その誤解を正し、そのような間違った適用を防ぐことは簡単なことだろうと思います。

このことから第一に、公同的精神とは〈思索的広教派主義〉ではないということを知ることができます。公同的精神はあらゆる意見に対して無関心ではられません。無関心は地獄の生みだすものであって、天国の生みだすものではありません。このように思想が落ち着かないこと、すなわち「教えの風に吹き回されること」（エペ4章14節参）は大きなのろいであり、祝福ではありません。無関心は本当の意味での公同主義と和解できない敵であり、その友ではありません。真の意味での公同的精神を持っている人は、今さら自分の宗教を求めする必要などありません。キリスト教の主な教義に関して判断するときに、彼はあたかも太陽のように確固として動きません。確かに彼は、自分の原理に反対して出されてくるものにはいつも耳を傾けてよく考える心構えができています。しかしこのこと

が原因で彼の思いの中に動揺があることを全く表に示さないように、実際何の動揺もないのです。彼は「いつまでどっちつかずによるめく」(I列王18章21節参)のようなこともないし、二つを一つにしようなどという無駄な努力もしません。自分がどのような精神を持っているかを知らないで自分を公同的精神の持ち主であると呼んでいる方々、このことに注意してください。自分を公同的精神の持ち主だと思ふのは、自分でぼんやりした理解力しか持っていないだけのことです。つまりその思いはかすみの中にあり、しっかりと首尾一貫した原理を持たず、すべての意見をごた混ぜにしようとしているだけのことです。ぜひこのことを確信していただきたい。あなたは完全に迷ってしまっています。あなたは自分がどこにいるか分かっていません。あなたは自分でまさにキリストの心を身に着けたと思っていますが、そう思ったそのとき、実際には反キリストの精神に近づいているのです。先ず行って、それからキリストの福音の最初の要素を学びましょう。そうすれば本当の意味で公同的精神を持つとはどのようなことかが分かります。

2 以上のことから第二に私たちが学ぶことは、公同的精神とはいかなる種類の(実践的広教派主義)でもないということです。それは公の礼拝や礼拝を行う際の外的な形式について無関心ではられません。無関心は同様に視福でなくのろいです。その無関心が残っている間は、霊とまことによって神を礼拝する助けとなるどころか(ヨハ5章3~24節参)、神に対する礼拝にとって言葉にならない妨げになるだろうと思います。しかし本当の意味で公同的精神を持った人は、聖所における天秤ですべてのことを測っていて、自分が加わっているその特定の礼拝様式に関して疑いも躊躇も持っていません。

彼には自分が神を礼拝しているこの方法が、聖書的であり合理的であるという確信があります。彼はこの世にこれ以上聖書的で合理的なものはないということを弃えています。したがってあちこちとぶらつくようなことはせず、その礼拝様式に忠実であり、礼拝する機会が与えられたことのゆえに神を讃美するのです。

3 それで第三に、公同的精神はどのような教派(congregations)にも無関心でないということを学ぶことができます。これは広教派主義のもうひとつの形態であり、前述のものと同じく不条理で非聖書的です。しかしその無関心さは真の意味の公同的精神を持った者とはかけ離れています。彼は原理において自分の不動のものを持っているだけでなく、自分の教派についても動くことはありません。

彼は精神的な面だけではなく、外側に現れるクリスチャンの交わりの絆を通して一つの集會に結びついています。彼はそこですべての神の儀式に参加します。彼はそこで聖餐式のテーブルにはべり、公禱によって自分のたましいを注ぎ出し、公の讃美と感謝に参加します。彼はそこで和解のことば(IIコリ5章19節)と神の恵みの福音を聞くのを喜びとします。彼は親しい最愛の兄弟たちと共に神聖な時をとって断食して神を求めます。彼は、彼らが自分のたましいを見守っているように、自分も彼らを愛の中に見守り、戒め、勧告し、慰め、講責します。さらにあらゆる点でお互いの信仰を建て上げようとします。彼はこの人たちをあたかも自分の家族のように扱い、神が自分に与えてくださった能力にしたがっ

て当然のように彼らの世話をし、彼らがいのちと敬廉さのために必要なすべてのものに困らないように準備をしてあげるので。

4 彼は、宗教的原則、すなわちイエスに関わるような真理だと自分が信じることについては簡単に動きません。また神の目に最もよしとしていただけると自分が判断する礼拝に、あくまでこだわって動きません。さらに彼はある一つの集会ときわめてやさしく密接な絆でつながっています。しかしそれでありながら彼の心は、自分が知っている人も知らない人も含めて、すべての人に対して広がっており、隣人も知らない人も、友人も敵も、きわめて強い誠実さをもって包み込んでいます。これこそ公同的、普遍的愛です。そしてこれを持っている人こそ公同的精神を持っている人です。愛によってだけこの人物をこの呼び方で呼ぶことができるのです。公同的愛こそ公同的精神なのです。

5 もし私たちがこの言葉をきわめて厳密な意味で取るなら、公同的精神を持った人とは、上述したような方法で「自分に対して正しい心を持っている」すべての人に「自分の手を与える」人のことです。また公同的精神を持った人とは、自分が受けている賜物、すなわち神についての知識、真の意味で聖書的な神を礼拝する方法、そしてとりわけ神を恐れかしこみ正義を行う（使徒10章35節参）集会との結びつきといった事柄のゆえに、どのように神を価値高く値積もり、神を讚美したらよいかを知っている人のことです。また彼は、可能な限り厳密に心を配ってこれらの祝福を保ち、それを自分のひとみのように守り、同時に主イエス・キリストを信じる人であればだれでも、その人たちの意見や礼拝様式や集会がどのようなものであっても、友人として、主にある兄弟として、キリストの体の一部として、神の子として、現在の神の御国に共に参画し、神の永遠の御国を受け継ぐ共同相続人として愛します。主イエス・キリストを信じる者とは、神と人とを愛し、神を喜ばせることに喜びを見だし、神を怒らすことを恐れ、すべての不法を差し控えることに注意を払う、良いわざに熱心な人たち（テト2章14節）のことです。これらのことを絶えず心にかけている人こそ真の意味の公同的精神を持った人です。人に対して言葉にならない優しさを持ち、彼らの幸福を切に願い、人の前に彼らの言い分を申し立てるだけでなく、神に対して祈りの中に彼らをとリなすことをやめません。彼の語り口は彼らに慰めとなり（I I 歴代誌32章6節参）、あらゆる言葉を尽くして彼らが神の働きに加わるよう励まします。また霊的なことであれこの世のことであれ、すべてのことにおいて力の限りを尽くして彼らを助けます。また彼らのために「大いに喜んで財を費やし、また自分自身をさえ使い尽くします」（II コリ12章15節参）。彼らのためには「いのちも捨てる」（ヨハ13章37節参）心備えさえできているのです。

6 あなたがた神の人は、これらのことをぜひ思いめぐらしていただきたい。もしこの道をすでに歩んでいるならばそのまま前進してください。もしこれまで道を間違っていたならば、あなたを引き戻して下さった神を讚えましょう。普遍的な愛というすばらしい方法で、あなたがたの前に置かれている競争を今こそ走り抜きましょう（ヘブ12章1節参）。判断するに際して動揺したり自分の心で自分を窮屈にしたりしないように注意してください。

い（Ⅱコリ 6 章 1 2 節参）。聖徒にひとたび伝えられた信仰に（ユダ3）根を下ろし、愛、すなわち真の意味での公同的愛に根ざし（エペ 3 章 1 7 節参）、永遠に愛の中に飲み込まれるまで正確に歩調を保ち続けましょう。